

ねじりはちまき

暑中お見舞い申し上げます。

平素皆様からは心あたたまる お引立てを賜りまして誠に有難く厚く御礼を申し上げますと共に 今後もよろしくお願い申し上げます。

7月は、1日 富士の山開きです。2日 半夏生。7日 小暑と七夕祭が一緒です。17日 海の日。23日 大暑。25日 丑の日です。

小暑とは二十四節気の夏至から15日目です。梅雨の晩期頃ですが、集中豪雨などに悩まされることがしばしばあります。梅雨が明けますと、本格的な厳しい暑さが始まります。そして蓮の花が咲き始めます。また山の鷹の子が巣立つ頃だそうです。

炎天に負けず、元気な夏を過ごされます事を心からお祈り申し上げます。

幸田 常一

*

*

*

*

*



お世話になっております。

5月末頃から、本宮市の現場で蔵の修繕工事をさせて頂いております。また、これから始まる工事に向けて打合せをさせて頂いたり、図面や書類の作成などしているところです。

「アサカヤマ」

皆様方ご存知のとおり、万葉集に、

安積山影さえ見ゆる山の井の
浅き心とわれ思わなくに

と記録されております。この山は、(国土地理院の25000分の1の地形図には、額取山と記載されています。)何故この山が、額取山との名称が付いたのか、その昔 八幡太郎義家が元服に先立ちこの地で額を剃った故事が謂れと山頂の碑に書いてありました。この額取山が何故「安積山」と呼ばれるようになったのかは、私にはわかりません。(以下「額取山」を「安積山」と書きます。)(郡山市日和田町に或る「浅香山」との説もある)。

私は、20年来 毎早朝散歩を続けておりますが、散歩のコースから安積山の眺めは実に素晴らしい。冬は山頂が純白の雪で装う壮麗な山。春から夏の間は、緑の着物を着て装う穏やかな山。秋には、錦で着飾る美しい山であり、この見事な山を眺める事の為に、早朝散歩が続いている理由の1つにもなっていると思っております。

さて、6月の中旬に私がお世話になって居ります Y 市の山岳愛好会の月例山行でこの安積山へ滝登山口から登ることになりました。

安積山は標高1009m、滝登山口からの標高差は約500m、登山道の距離は2.5kmとなりますが、私もこの登山に参加して山頂に立つ事が出来たので、そのことについてご報告致します。

安積山への登山口は、滝登山口の他に2か所あります。その1つが御霊櫃峠口です。このコースは稜線歩きのコースで眺望が実に素晴らしい事と、5月下旬には全山を真っ赤に飾る山躑躅(ツツジ)が見事なものです。この他に、熱海登山口があります。熱海登山道は、中間で滝登山道と一緒にあります。このコースは杉や雑木が生い茂り眺望は良くないのですが、日陰の稜線歩きを楽しめます。3コースとも滑落するような危険な場所はなく、大人から子供さんまで山歩きを楽しむことが出来る山であると思えます。

登山の当日は、前日までの雨も上がり絶好の登山日和に恵まれ、14人の仲間が全員元気に K 市を出発しました。滝登山口には予定時間に到着。何時もの様に準備体操をした後、良く整備されている登山道をスギの林や雑木林の中を、

澄み切った爽やかな空気を存分に楽しみながらルンルン気分で山頂をめざして登りました。2時間30分程で、山頂を足下にすることができました。

私は以前に各登山口から何回かこの山に登っていますが、今回程良い眺望を楽しんだことはありません。

眼下には、鏡のような苗代湖、その向こうに秀麗な磐梯山、東に目を転ずれば、中通りの街並み、その先は阿武隈の山々。西側に眼を転ずれば那須連峰に続き会津の山々が指呼の間続く。文字通り360度の展望を心行くまで楽しむことができました。山頂の標柱を中心に、本日の参加者全員で記念写真を撮りました。写真撮影の後昼食、持参したおにぎりの美味しいこと。天下一品とは今日の握り飯のことかと思う程美味しい。

帰路は、往路を忠実に辿り、K市の温泉で汗と疲れを洗い流して、家内の待っている家に元気に戻る事が出来ました。山の仲間迷惑をかけることを前提にして来年も山歩きが出来たら幸いと思う此の頃です。

K. S 記

* * * * *

今月の旬♥食材

「うなぎ」

7月といえば、やっぱりうなぎですね。(*^_^*)

ビタミンA、B1、B2、Eが豊富で、ミネラルをバランスよく含んでいます。夏バテ気味かなというとき、ぜひ利用したい食品です。

蒲焼はもちろん、卵焼きの芯にしたり、塩もみしたキュウリと二杯酢であえたり色々な料理が楽しめます。

.....

<お知らせ>

鈴木芳一と武田和也ですが、本当に残念なのですが、この度退職することになりました。

短い間でしたが、皆様方には大変お世話になりました。

王の墓の話

今回は墓を取り上げてみたい。墓といっても然るべき「王の墓」である。中国の「兵馬俑」、エジプトの「ピラミッド」そして日本の「古墳」の三つである。なぜ関心を持ったのかというと、かくの如き大きく、しかも装飾品を多く備えたものを造ったものかと思ったからである。そこにはどんな願いが込められていたものか、それをご本人の遺志か、遺された者の意思か。三つの「王の墓」を比較してみるまでいけるかどうか分からないが。

まず、中国の「兵馬俑」だが、これは秦の王・始皇帝の墓（帝陵）である。始皇帝は紀元前246年から210年まで秦の王位にあった。即位したころは戦国時代であったが、紀元前221年には史上初の中国統一を成し遂げて皇帝となり、その後210年に49歳の若さで死去した。ここでは始皇帝の政治については省く。さて陵墓のことだが、彼は即位するとすぐ247年には大規模な陵墓の建設に着手したというのだ。出来上がった陵墓自体は桁外れに大規模（体積で300万 m^3 ）・世界一）なものである。その陵墓を取り巻くように2万 m^2 に及ぶ兵馬俑坑が配置され、調査の結果戦車が100台余、陶馬が600体、成人男子の等身大の武士傭が8000体近く発見されている。まだ未調査のところがあるという。兵馬俑自体は後任の皇帝が設置したとの説もある。いずれにしても始皇帝が陵墓建設に10歳代の早くから関心を持っていたのは間違いない。それは何故か。実は始皇帝は「神仙思想」に傾倒していたのである。神仙思想は「不老不死の秘術（靈薬）あり」と説く。不老不死の秘術を会得した（称する）者が方士と呼ばれる。その方士から始皇帝は神仙思想を吹き込まれたのだ。帝陵の建設は「死後」のことを考えてのことではなく、「不老不死」を願い、しかも兵馬俑に託して「皇帝の地位」もそのままという願いを込めたのではなかろうか。もちろんこれは推測であるが、ほぼ間違いないと思う。中国側には、徐市という方士がいて、始皇帝に東方の海に蓬萊山があり、そこに不老不死の靈薬があるので持ち帰ると具申し、許しを得て数千人の童子・童女を連れて船出したが、ついに戻らなかったと伝えられている。そして日本側にも徐福伝説があるのだ。徐福一行は佐賀県に上陸したという。蓬萊山というのは実は富士山のこと、そこまで辿り着き、そこが余りにも居心地がよくて住みつき、ついに中国には戻らなかったという。徐市と徐福は同一人物というわけだ。本当にあったと思わせる点もあって面白い話である。いずれにせよ、始皇帝は「不老不死」を心底願っていたのだ。特にその願いが「兵馬俑」に象徴的に表現されていると思うが、いかがか。この兵馬俑は小生も見学する機会があった。兵馬俑博物館まで西安からバスで行った。館内に入って先ず数の多さに圧倒された。高台から見下ろすかたちであったので、全貌が眼に飛び込んできた。武士傭の形相と体形にも迫力があつた。ここまでやるのかとも思った。まさしく「皇帝の権勢」を感じさせるものであつた。

次はエジプトの「ピラミッド」の話に移ろう。墓の話に入る前に、ピラミッドは奴隷の労役を使って建設されたのではなく、一種の公共事業として労働従事者を雇うかたちで建設されたというのが最近の説だ。だが、石材をどこからどうやって（ナイル川が直そばである）運んだか、それをどうやってあの形に積み上げたのかについては、いろいろ説はあるが、依然として謎である。でも機械力なしで実際に出来たのだ。カイロの近く、キドに3大ピラミッドがあるが、最大のはクフ王のピラミッドである。平均2.5トンの石が300万個積み上げて出来ている（高さ140m・世界一）。20年かかったという。紀元前26世紀の4500年前のことである。建造はクフ王の死後ではなく、生前の建造で、王が完成した姿をみているとの説もある。実はこのピラミッドの王室とみられるところからはミイラや棺、副葬品が見つかっていない。見事に空っぽである。盗掘されたのかどうか。では、王室まで設けて一体何のために建造したのか。本当に、ピラミッドは王（ファラオ）の墓なのか。なお現在もいろんな角度から研究がなされているが、謎だらけである。しかし、どうもこれで終わるのは忍びない。余談だが、ピラミッド研究の第一人者である

吉村作治によれば「太陽の船」が発見されているという。その船は天と地を結ぶもので、どうもオリオン座に王の魂がいくように託されていたとのこと。そのためにピラミッドが設計されているとか。天(神)にいくらかでも近づきたいとの願いが込められているのか。それにしても不思議なのは、キドからナイル川上流の地に「王家の谷」と称される場所があって、古代エジプトの王の墓(石窟)が集まっている。ほとんどが盗掘されているが、これまで64の墓が確認されている。唯一未盗掘で発見されたのは、「ツタンカーメン」の墓である。発見したのはイギリス人考古学者のハワード・カーターである。発見まで31年かかった。その4年後、石棺の中の黄金のマスクを外し、若き王(19歳で死去)のミイラに直面できたのであった。歴史から抹殺された王であるが故に未盗掘であったとのこと。ツタンカーメンは紀元前14世紀の王であり、発見されている墓は皆その前後のものである。クフ王の時代はさらに1千年以上遡り、クフ王時代の墓は「王家の谷」からは発見されていない。そのことから考えると、やはりピラミッドはファラオの墓である可能性があるかも知れない。早く解明されることを期待したい。

次は日本の「古墳」のことである。3世紀半ばから7世紀にかけて築造された墳墓、つまりお墓である。全国に分布し、これまで発見されている古墳は16万基以上に上るそうだ。それは、大きさ、形状ともに様々だ。知られている天皇陵もあれば、大和政権による統一前の地方の王あるいは豪族の墳墓といったものもある。形状でいえば、円墳、方墳、八角墳、双方中円墳、また山が二つある前方後円墳、双方円墳などがある。墳丘を石で築造した積石塚があったり、石室が竪穴式か横穴式であるとかしている。また、石室の壁に線刻や絵画を施しているものもある。絵画で有名なのは高松塚古墳やキトラ古墳である。古墳のイメージは墳丘が樹々に覆われている姿だが、もちろん築造当時はそうではなかった。時が経ってそうなっている。古墳といえば、その代表格は前方後円墳の仁徳天皇陵(大山古墳・堺市)であろう。この古墳は面積が47万㎡あって、世界一だそうだ。前方後円という形状は日本独特とのこと。発見されているのが4800基ある。この形状は何を意味しているのか。ましてや墳丘の周囲に水を張る周濠もある。諸説あってよくわかっていない。でも建造した当時、然るべき地位の死者を祀る方式の考えがあったのは間違いないことだ。だが、先に取り上げた始皇帝やクフ王のように生前に自分の墓を造らせるようなことは日本ではなかったのではないか。あくまでも推測だが。天皇陵のことだが、この調査が難しいとのこと。所管の宮内庁からなかなか許可が出ないというのだ。地方の豪族の古墳として一つ紹介する。5世紀後半から6世紀初めにかけて造られた「保渡田古墳群」(高崎市)がある。今は公園として整備されている。その中に「八幡塚古墳」があり、建造当時の姿に復元されている。この古墳は前方後円墳である。後円部にあった棺(舟形石棺)が公園内の施設に展示されている。ところで、この古墳で発見されたものに動物や人物の「埴輪群」があり、それが復元されて、発見された時のそのままの配置で陳列されている。この埴輪群は他では発見されていない。これを見て、中国の始皇帝の「兵馬俑」を思い出した。共通項があるように思えるがいかがだろうか。今回はこれで終わりとする。

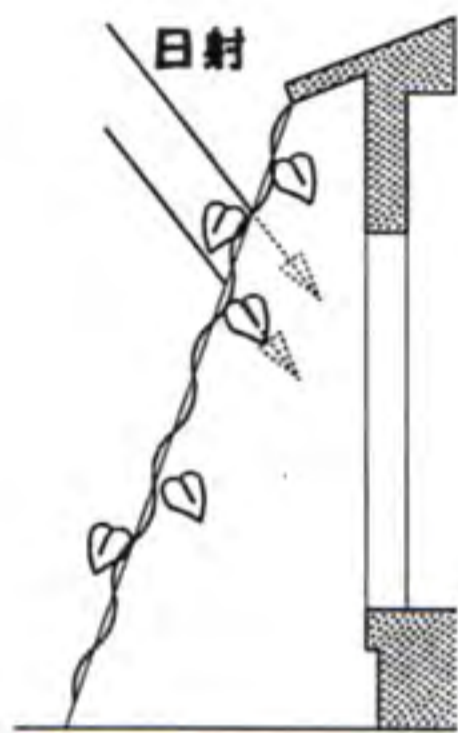


夏の暑さ対策！！

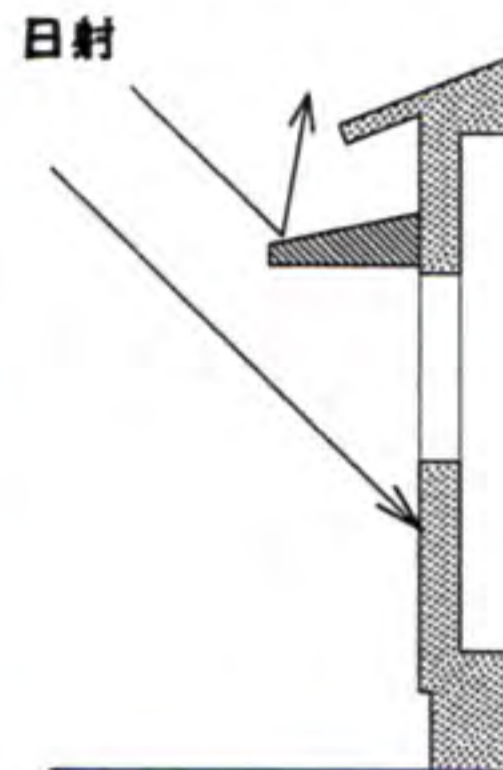
【日除けをつける！】

窓には普通内側にカーテンやブラインドがついていますが日除けは窓の外側につけたほうが断然効果的です。室内日除けの場合、結局日射の熱を内部に熱をいれてしまうので、50%程度しか日差しの熱をさえぎれませんが、室外の日除けの場合、日除け表面で熱を逃がすため日射の80%～90%程度さえぎることができます。

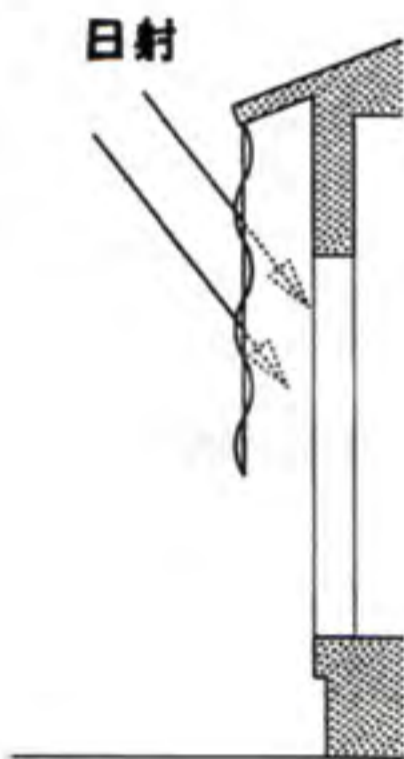
グリーンカーテン取付



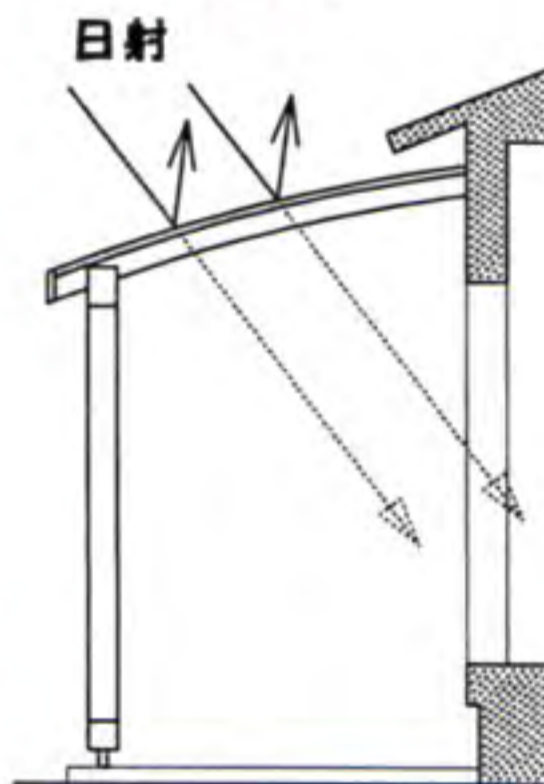
ひさし取付



すだれ取付



テラス据付



平成29年 7月5日発行
有限会社 幸田建設
＜発行責任者＞幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話、0243-44-3816

＜後記＞

今月は大幅に発行が遅れてしまいました。すみません。梅雨はまだ明けていませんが、毎日暑いですね。今年の梅雨は雨が少ないので、これはこれで心配です。どうかお体大切に…（事務員k）